

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

5月初旬の日曜日に地域が実施する地域内水路の普請作業に参加する。普請とは一般的な共同勤労の意で、普く大衆を招請して

均等に労働作業に従事することだが、地域組織に加入しない世帯も多くなり今後の同人社会のあり方についての論議は避けられないだろう。

主要な作業箇所は、楠川本流から取水した防火用水や農業用水確保目的の水路の維持管理作業で、高低差を確保するために山林の中に施工された水路のため、冬期間は水が流せず大量の落ち葉や降雪による樹木の被害木が堆積したものを片付けるのだが、毎年浸食される水路は深くなり、高齢者主体のメンバーには辛い作業でもあ

る。だが参加者は、作業の必要性は十分理解しており、地域住民が集う作業を楽しむ良い機会だ。

水の大切さを知り尽くした昔の人は、麵や野菜をゆでた温湯を流しに捨てる際、まず水を流して

「すいません」という。流しの向こうには、どんな小さな生き物がすんでいるのかわからない、「見えないもの」の命にも心寄せて頭を下げなくてはと教えられたものだが、下水道が整備された環境で育った人たちが多くなった今、この

「見えないもの」に心寄せる日々が大切だ

「見えないもの」にも思いやる教えはどの様な形に姿を現して伝えられて行くのだろうか。

昔唄われた「里謡・子守歌」の一節「ねんねの父さん何をすする春は桜が咲いたなら山にはいかぬ川へいく

秋は野菊が咲いたなら川にはいくな山へいく」と、春一番には川に、そして水の確保が大切だと。生活するための知恵を子守歌からも教え、人を育てた知恵に感心する。外来種の繁殖の威力

なか里には、タンポポの黄色の花が埋め尽くす。国語学者の金田一晴彦さんの「ことばの歳時記」に、舊の形から鼓に似てみえることから「つづみ草」と呼ばれその鼓の音を、昔の人はタン、ポン、タン、ポンと聞きなしたところから、子ども

達かタンポポと呼んだと記している。なぜかタンポポを観ていると、楽しくなってしまう。一因なのかもしれない。



畦草の草刈時期だが、道端を彩る花は訪れる人には好評だ

けよ咲けよとさまよきながら」と口ずさみながら、四方から小鳥のさえずりを聞きながら、小川のせせらぎを

求めて山里を楽しんではどうだろうか。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)